

「地域の祭り」と図画工作教材化の課題—ねぶた灯籠製作の実践を通して—

蝦名敦子

これまで弘前大学教育学部附属小学校で、3 回に渡ってねぶた灯籠製作が図画工作の授業で行われてきた。2011 年の題材 1 「ようこそ、わたしたちのまちへ」(小 4) と、2012 年題材 2 「わたしたちのめざすかたちに～小さな大工さん～」(小 4)、2014 年題材 3 「アート集団 6 年 2 組がやってきた」(小 6) である。題材 2 の実践をした学年が 6 年生に進級して、再び灯籠製作に取り組んだのであるが、教材として様々な問題点が提示された。本稿ではこの題材 3 について、これまでの灯籠製作と比較しながら本題材の意義と問題点を整理し、地域の祭りへの参加を視野に入れた教材のあり方—課題を明らかにする。

学年が上がって再度挑戦となると、児童の表現意欲は一層大きく膨らんでいき、彼らは弘前城の 4 面と「四神」を描いたミニ灯籠を班ごとで製作した。題材 2 での既習の技能を応用して形を組み合わせ、段階的に大きさを変えて三層に接合する工夫により、なんとか「立体に表す」ことができた。しかし祭りに参加するとなると、実際に安全に持ち続けるための強度の点では不十分であり、最終的に大人の手による補強が加わったのである。その強度については、子どもの既習内容による形の組合せや工夫で達成できるものではなく、全体を構造力学的な視点で捉え直すことが必要であった。そこに配慮が至らなかった点に教材としての限界があり、構造について考える工作的な面に、さらなる教材の充実と指導力が要求された。

他方、子どもが主体的に取り組んだ本題材を通して、彼らが理想とする製作の有り様を見ることができた。授業の教材としては児童の発想や表現意欲を踏まえて、改めて丈夫さを伴った灯籠を 6 年生が製作できるように、教材化することが望まれる。予め具体的に児童の最終的な形がある程度想定された上で、それに向けた工作のもつ丈夫さを伴った教材化が可能であってこそ、高学年の図画工作における灯籠製作の題材が、教材としても質的に地域の祭りに匹敵するような対等なものとなったと言えよう。

他の灯籠製作と比較すると、題材 3 では伝統的な扇形から一歩踏み出し、創作的な立体造形としての灯籠製作に児童は挑戦したことになる。祭りに参加できる灯籠としては未完成であったことが否めないが、子どもの造形能力が十分発揮されたことの意義は大きい。祭りを教材化する今後の課題として、①灯籠製作が図工科の題材となるためには、一部の学年だけではなく、児童の発達段階を視野に入れた系統立った題材化も重要となる。②既習内容から発展・展開する、子どもの創作力を踏まえた教材化の必要性が浮き彫りになった。ねぶた祭りという地域文化を学校教材に関連づけることは、実際には人も時間も要し容易ではないが、児童の興味・関心を引きつけ、潜在的な造形能力を十二分に発揮させ得る教材として大きな意味のあることは、実証されたとと言えるのである。